

中世における「おもしろし」の意味・用法について —抄物と狂言を中心に—

黄 龍夏

1. はじめに

本稿は、古代語感情形容詞の全体的な史的推移の傾向と意味体系の記述の糸口として、「をかし」との類義関係の微妙な感情形容詞「おもしろし」に的を絞ってその性格を考察する。資料として、中世の抄物・狂言などの口語資料、一部の外国資料を用い、中世における「おもしろし」の様相を調査し、その意味・用法は如何なるものかを究明するのが目的である。

古代語の感情形容詞に関する先行研究においては、その意味・用法が共時的、通時的観点から検討されているものの、未だ個々の感情形容詞の意味・用法さえ明確に分かっていない部分が多く、さらにその類義語同士の関係から全体的総合的な語彙の意味・用法をとらえることは課題として残されているのが現状である。感情形容詞「おもしろし」の場合も例外ではない。「おもしろし」に関する先行研究はいくつかあるが、その内、主なものに以下のものがある。各々の要点をまとめると以下ようになる。

犬塚 旦(1973)は、中古の「おもしろし」の用例を大きく、①芸術関係②自然関係③その他に分けて分析し、上接・下接語との関係から関係語との比較によってこの語の意味性格を述べている。特に注目すべきは、この語の著しい特徴として、「人間ないし人間性のありようについての評として用いられることなく、自然・芸術・家屋などのたぐいにかざられている」と指摘している点である。

山崎良幸(1978)は、『源氏物語』の「おもしろし」の用例147例を対象別に大きく、「自然」「人事」「その他」に分けて分析し、「おもしろし」の意義を述べているが、それらの分析はあくまでも美的な観点からの分析であり、「美意識を表現する語」としてとらえたものである。「その他」については詳しく触れられていない。

松尾 聡(1982)は、「おもしろし」に関して幅広い詳細な調査・研究が見られる。上代・中古・中世前半期の文献の「おもしろし」の全用例を調査し、①その対象が「音楽、花、紅葉、月、水(雪・霜など)、御殿・寺院、絵画、詩歌、催しごと(行事)」のようなほぼ九類に限られて用いられており、例外的な「その他」がわずかにある。また、その語意はほぼ「明るく晴れやかな感じだ」におさめられる。②中世前半期から「九種類の限定された対象」から若干外れた用例が目立つようになり、後半期の曽我物語になると、語

意にも変化が見えて、「機智が楽しい」の意に用いられているか、こうけとれる例などもわずかに見えてくる、というような指摘をしている。しかし、実際の用例分類ではいくつが出てくる例外的な「その他」の用例(特に『堤中納言物語』『建礼門院右京大夫集』『無名草子』『従然草』など；「人」とか「人の様子」)を、無理やりに九類に入れようとしている点もあり、その分類にやや疑問を感じる。

このような先行研究からある程度「おもしろし」の性格が把握でき、参考にすべき点も多いが、納得しにくい所もある。さらに言えば中世の抄物類と狂言類などの文献にもこれが当てはまるのかという問題もある。そこで、本稿では「おもしろし」の様相を調査し、その意味・用法を考察していきたい。

今回調査対象とした文献は以下のとおりである^①。

〔抄物〕『史記抄』・『毛詩抄』・『蒙求抄』・『論語抄』（『論語抄の国語学的研究』影印篇・研究索引篇）（武蔵野書院）・『四河入海』（『史記抄』『毛詩抄』『蒙求抄』『四河入海』は、主に『抄物資料集成』（清文堂）の索引篇（要語索引）によったもので、部分調査である）・『中華若木詩抄』（抄物大系（勉誠社）・『中華若木詩抄文節索引』（笠間書院））

〔外国資料〕『天草版平家物語』（『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院））・『天草版イソボ物語』（『エソボのハプラス 本文と総索引』（清文堂））・『捷解新語（原刊本）』（『三本対照捷解新語 本文篇・索引篇』（京都大学国語学国文学研究室））

〔狂言台本〕『天正本』（『天正狂言本 本文・索引・研究』（笠間書院））・『虎明本』（『大蔵虎明本狂言集の研究』（表現社））・『天理本狂言六義』（『狂言六義全注』（勉誠社））・『狂言記』（『狂言記の研究』（『狂言記外五十番』（『狂言記外五十番の研究』（『続狂言記』（『続狂言記の研究』（『狂言記拾遺』（『狂言記拾遺の研究』（以上、勉誠社））

2. 「おもしろし」の用法

論証方法としては、まず、「おもしろし」という感情形容詞がどのような語法で用いられているのかの調査結果を示し、そこから、「おもしろし」の性格を考察する。用法は文中での機能を中心に大きく連体用法・連用用法・叙述用法に分けて考察し、その評価対象も『分類語彙表』にそって調査・考察する。

中世の抄物類と狂言類などの文献における「おもしろし」の用法は以下の【表 1】のとおりである^②。

中世の「おもしろし」の性格を知るためには中古における「おもしろし」の用法を把握しておく必要がある。中古の和文系の資料の内、一番「おもしろし」の用例の多い『宇

津保物語』と『源氏物語』における「おもしろし」の予備調査によると、中古においては叙述 43.7%・連体 40.6%・連用 15.8%の順となるが、中世においては叙述 48.2%・連体 33.3%・連用 18.5%の順となっており、連用用法の増加と連体用法の減少という変化が見られる。また、中世の中においても、抄物資料では、叙述 49%・連用 26.3%・連体 24.8%の順、また狂言資料では、叙述 46.9%・連体 43.7%・連用 9.4%の順というように文献の種類において異なりがある。一方で、すべての文献において、文末叙述としての用法がその大半を占めていることが分かる。

【表 1】「おもしろし」の用法

作 品		史記	毛詩	蒙求	論語	四河	中華	天平	天伊	捷解	天正	虎明	天理	狂記	狂外	続狂	拾遺	計
用 法	連体用法	21	18	22	4	0	19	4	1	1	4	30	47	9	2	16	13	209
	連用用法	59	12	8	6	2	2	0	0	0	0	7	19	0	0	0	0	116
叙述用法	文末	49	33	27	13	1	22	2	1	0	2	36	35	10	5	10	20	266
	叙述	7	5	0	1	0	8	0	0	0	0	6	4	1	1	0	0	37
計		136	68	57	24	3	51	6	2	1	6	79	105	20	8	26	33	628

2.1 連体用法

「おもしろし」が連体修飾成分として用いられるものを分析し、その被修飾語を『分類語彙表』に沿って分類すると、次の【表 2】のようになる^③。

中古の和文系の資料の『宇津保物語』と『源氏物語』における「おもしろし」の予備調査から、連体修飾用法における被修飾語は「抽象的關係」(各々 68 例・18 例/40.1%)「自然・自然現象」(17 例・10 例/13%)「人間活動」(16 例・5 例/10.1%)の順となり、「自然・自然現象」の用例の多いことがわかる。また、「人間活動の主体」の用例は 1 例に過ぎないことが注目される。

しかし、中世の抄物・狂言などの口語資料における調査では、【表 2】のごとく「抽象的關係」「人間活動」「人間活動の主体」の項目の用例が多く、その中でも、「人間活動の主体」の用例の増加が目立つ。また「人間活動」と「人間活動の主体」の用例がかなり高い比率(約 30%位)を占めているが、「自然・自然現象」に関する用例は約 10%減少することから、中古から中世に移るに当たって大きな変化が起こっていると見られる。

【表2】「おもしろし」の被修飾語の内容

作品 意味分類	史記	毛詩	蒙求	論語	四河	中華	天平	天伊	捷解	天正	虎明	天理	狂記	狂外	続狂	拾遺	計	%
1.1 抽象的關係	13	8	8	3	0	6	1	1	0	3	17	25	6	2	14	11	118	56.5
こと・もの	12	5	6	2		5		1		3	11	21	5	2	14	11	98	46.9
様 相											2						2	1.0
空間・場所	1	3	2	1		1	1				4	4	1				18	8.6
1.2 人間活動の主体	1	1	2	0	0	0	1	0	1	0	5	8	2	0	0	0	21	10.0
1.3 人間活動	7	6	11	1	0	4	0	0	0	0	3	5	1	0	2	1	41	19.6
心・声など		1				1											2	1.0
言動・名	4	2	10	1		2					2					1	22	10.5
芸術・文芸	3	3	1			1				3	2			2			15	7.2
習俗・遊樂												1					1	0.5
行動・様子											1						1	0.5
1.4 生産物・物品	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	9	4.3
物品・調度品						1						2					3	1.4
衣 服											1						1	0.5
食料など		2									2						4	1.9
地 類											1						1	0.5
1.5 自然・自然現象	0	1	1	0	0	8	0	0	0	1	5	3	0	0	0	1	20	9.6
天 地		1	1			5					1						8	3.8
植 物						2				1	1						4	1.9
動 物										4							4	1.9
音・香											2					1	3	1.4
生命・病氣など						1											1	0.5
計	21	18	22	4	0	19	2	1	1	4	30	47	9	2	16	13	209	

幾つかの例を示す。

- (1) その朝頼朝ちぶつだうにを經誦誦してござるところに、千手が帰参ったをござらうぜられて、頼朝わ千手に面白くなかうどをしたものかなと仰せられたれば：～（天草版平家物語・巻四 304・8）〔人間活動の主体〕
- (2) やれ／＼おもしろひやつじや、（虎明本・よびこゑ上 320・13）〔人間活動の主体〕
- (3) 出ツ逢盜蘭池面白名チヤソ（史記抄・秦始皇本紀第六・四 36 オ 7）〔人間活動/言動・名〕
- (4) 面白タトヘソ（蒙求抄・四・39 ウ 11）〔人間活動/言動・名〕
- (5) 汙／＼してあとからみて、きやつは、かたわ者じや、一方、すねがふとい、是はこいずねと云物じや、道すがら、なぶつてあそばうと云て、扱してわたる仕廻

也 洩／＼ 汚／＼さきから、別におもしろい咄もない、たゞあらうよりも、
道すがら、狂歌成共ようで、あそぶまひかと云（狂言六義・芥川・698-15）〔人間
活動／言動・名〕

- (6) おもしろひ物語が有、（虎明本・枕物狂中 226・3）〔人間活動／芸術・文芸〕
(7) ソノヤウニ面白夜酒ヲノムヨ（毛詩抄・一〇8 才 8）〔生産物・物品／食料〕
(8) マツ酒ヲマラセテ脯醢分テシハヒシヲナトノ様ニ面白肴ヲ取タスソ（毛詩抄・一
五 26 才 10）〔生産物・物品／食料〕
(9) 他ノ病トチガウテ。面白キ病ナルホトニ。カウ云ソ。（中華若木詩抄・巻下・279）
〔自然・自然現象／病気〕

例の(1)と(2)は「人間活動の主体」の例である。用例の増加と共に「おもしろし」の被修飾語として「やつ」のような表現が用いられていることが注意される。『天理本狂言六義』にも1例が見られ、2例共に「滑稽だ」の意味として解釈されることから、「おもしろし」の用法・意味の変化が見てとれる。

例の(3)から(6)は、「名・喩え・咄・物語」のように「人間活動」に関する例である。特に抄物資料においては「返事・文章・字」などの用例が多い。また例の(7)と(8)は「生産物・物品」、例の(9)は「自然・自然現象」に分類される例であり、珍しい用例である。

2.2 連用用法

ここでは後続する用言の面から、中世の「おもしろし」の性格を見ていきたい。中世の「おもしろし」には、その後続する用言に幾つの特徴があるようである。

第一に、知覚動詞類（[思う・感じる]類（2 例／1.7%）・[見る・見える]類（3 例／2.6%）・[聞く・聞える]類（1 例／0.9%））が非常に少ないことである。

第二に、知覚動詞が少ない反面、「する」「やる」のような[する]類の用例と「云ふ」「申す」などのような[言う]類の用例が非常に多いことが大きな特徴となる。全体としては[する]類（27 例／23.3%）・[言う]類（33 例／28.4%）が高い割合を占めている。また、後続する用言の種類が多い。これは中古から中世にかけての連用用法の増加と連体用法の減少という大きな用法の変化と関連する現象である。

第三に、「おもしろし」の意味・用法と深く関わる動詞が後続することである。例えば、「たばかる」「調法する」「飲む」「食べる」などのような動詞がそうである。中古において、知覚動詞と「弾く」「吹く」などが主に後続したことは異なる。

- (10) 辯オノ処ヘ行テモシロウタハカツテトツタソ（四河入海・九ノ二 52 ウ 12）

- (11) しう出て、よそより、めづらしき、樽をゑてあるほどに、一人たべうよりも、

たれぞ申入て、おもしろうたべうと云て、太郎くわじやを、よび出す（狂言六義・真似・172-5）

このように後続する用言の面からも、中世の「おもしろし」の新しい用法が見られるわけである。

2..3「おもしろし」の対象

「おもしろし」の対象については先行研究においても最も力を入れ研究されているところである。特に松尾(1982)がその典型である。先行研究にならい、本稿でも「おもしろし」の対象を分析した。【表3】(次々頁)を参照されたい。

中古の『宇津保物語』と『源氏物語』における「おもしろし」の対象は、「人間活動」44.3%、「自然・自然現象」33.1%、「生産物」20.2%の順のように、「人間活動」の比率が一番高いものの、五割を超えない。また「人間活動」の中では、「芸術・文芸」に対して集中的に用いられている。「自然」においては、植物・音などについて主に用いられていること、「生産物・物品」では「住居」に対する使用が主な使い方となっていることが中古における「おもしろし」の特徴として見る事ができる。そして、「人間活動の主体」の用例が1例も見あたらないことも注目される。

中世における「おもしろし」の対象は、「人間活動」「自然・自然現象」が主な対象となり、約 94.9%を占める。特に「人間活動」は、約 40%増加をみせる著しい変化である。また「自然・自然現象」は中古に比べて減少はしているものの、相変わらず 12%の使用率でかなり高い。「人間活動の主体」は少ないが、中世に入ってその姿がみられる。中世の「人間活動」については、中古との比率の違いとともにその内容においても大きな特徴が見られる。主に「言動・名」「芸術・文芸」「習俗・遊楽」などに用いられているわけであるが、特に「言動・名」の意味項目の対象が目立つ。

このように「人間活動」が中古・中世ともに比率が非常に高いが、「人間活動」「人間活動の主体」が中世に入って約 85.2%となる。中でも特に、「人間活動の主体」の増加が目立つ。「自然・自然現象」などは減少してはいるものの、まだその使用率はかなりのものがある。いくつかの用例を見ておく。

(12)重衡心を澄まいて、やあ御前、あまり面白いに、何ぞま一度とあつたれば、〈天草版平家・巻四 303・23〉[人間活動/芸術・文芸]

(13)▲(大名)判官殿の思ひ人とぬかすによつて。しつか御前の事をいひだすかと思ふて。心がおもしろかつたに。判官どのと弁慶のいつちぎりやつた。あのやうな者はいなせ。〈狂言記外一・今参 9ウ6〉[人間活動/心・声]

(14)必ノ字面白シ《論語卷五・郷党第十・二二ウ 10》〔人間活動/言動・名〕

(15)▲僧 あゝ。それは、おもしろう。御さろう《狂言記・笠の下・巻四 21 オ 1》〔人間活動/習俗・遊楽〕

(16)▲シテ 大くわほうの大名。扱世の中に。慰はおほけれど。殺生程面白物はない。夫故毎日／＼。此河内の禁野へ殺生に参る。《続狂言記・禁野・巻四 23 オ 1》〔人間活動/行動・様子〕

(17)▲イサリ 是は此当りに。かくれもないいたづら者でござる。～道行扱も／＼うつけたこと致した。面白／＼と存じ。致してケ様になつてござる。《続狂言記・三人片輪・巻五 32 ウ 1》〔人間活動/行動・様子〕

(18) ある童、手習ひにやる所から友だちの手本を盗んで来れども、その母はこれを折檻もせいでくによって、日々に筆・墨などを盗んで来て、盗みほどの面白いことはないと思ひ、成人するに従うて、後には大盗人となって、《天草版イソボ物語・母と子の事 65》〔人間活動/行動・様子〕

(19)かやう事をそろ／＼といったせは、おもしろふて、後にはほんのぬす人になる物じや《虎明本・うり盗人下 39・2》〔人間活動/行動・様子〕

(20) 高祖ノ面白ハコヽソキフイ人チヤカホツキトラルヽ人也《季布欒布列伝四十・十二 36 ウ 4》《虎明本・うり盗人下 39・2》〔人間活動の主体〕

例(12) から(19)までは、「人間活動」に関する用例となるが、「芸術・文芸」「心・声など」、「言動・名」、「芸術・文芸」、「行動・様子」に関する対象である。各々歌、心、表現、酒を飲むこと、殺生、博打、盗みについて「おもしろし」と評価している。この内、酒を飲むこと、殺生、博打、盗みのようなことに対しても「おもしろし」を使うようになったことは、中世における「おもしろし」の性格を知るための好材料となる。「殺生」については『蒙求抄』にも 1 例が見られる。前の例(7)も「酒」に関するものであり、これに関する対象は計 13 例も見られる。

『邦訳日葡辞書』に「Vomoxiroi(オモシロイ)。また、比喩。何か罪惡になる事とか、ある感覚の働きとかから感じる楽しみ」(713 頁)と説明されているように、このような用例が「おもしろし」の対象に加わった結果、『邦訳日葡辞書』のような記述が出来たのではないだろうかと思われる。

例(20)は「人間活動の主体」についての例である。「人(高祖)」についての評価である。中世に入ってから「人間活動の主体」の用例が少ないものの、連体用法と共に対象の方でも増えてくることは注目に値する。

【表3】「おもしろし」の対象⁽⁴⁾

作品 意味分類	史記	毛詩	蒙求	論語	四河	中華	天平	天伊	捷解	天正	虎明	天理	狂記	狂外	続狂	拾遺	計	%
1.1 抽象的關係	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	4	1	1	0	0	0	9	1.8
こと・もの			1	1							2	1	1				6	1.2
様 相											1						1	0.2
空間・場所		1									1						2	0.4
1.2 人間活動の主体	4	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	10	2.0
1.3 人間活動	102	51	32	19	1	15	6	2	0	1	47	67	13	6	20	28	410	83.2
心・声など	5		9			1		1			4	7		2		2	31	6.3
言動・名	92	41	10	14		7	2				13	19	1		5	4	208	42.2
芸術・文芸	4	10	8	2		5	2			1	16	14	6	4	8	3	83	16.8
習俗・遊楽			2			2					14	16	3			18	55	11.2
行動・様子	1		3	3	1		2	1				11	3		7	1	33	6.7
1.4 生産物・物品	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	4	0.8
物品・調度品												1					1	0.2
衣 服														1			1	0.2
住 居		1															1	0.2
乗り物													1				1	0.2
1.5 自然・自然現象	1	4	6	0	1	24	2	0	0	2	8	7	0	0	1	2	58	11.8
天 地		2	3		1	15	1			1	2	6			1		32	6.5
植 物	1					7	1				1						10	2.0
動 物		1	1			1					2						5	1.0
光・色																	0	0
音・香		1	2			1				1	3	1				2	11	2.2
不 明				1											1		2	0.4
計	107	57	42	21	2	39	8	2	0	3	60	77	16	7	22	30	493	

3. 「おもしろし」の意味

『日本国語大辞典』(第二版)における「おもしろし」の意味記述には、「①見て楽しい。②興味をそそられる。③趣がある。④望ましい状態である。⑤こっけいである。おかしい。」のように、大きく五つの意味ブランチが立てられている。諸辞典類はほぼこれに準ずるが、『時代別国語大辞典 室町編』には、より多くのブランチが立てられ、詳しい記述が見られる。「おもしろし」の意味ブランチのうち、特に一の③「一味変った味やにおいを好ましく感じるさまである。」・④「その事柄によって自分の期待や欲望が満たされて快感を覚えるさまである。特に、罪悪や情欲などにおける快感についていう

ことが多い。」という意味ブランチの記述から中世における「おもしろし」の性格が伺われる。

「おもしろし」の意味を辞典類などの記述を踏まえ、次のように①から④までの意味領域別に再分類して考えたい。

- ①「楽しい、うれしい、快い、気持ちがよい、愉快だ」
- ②「興味がひかれる、面白い、心がひかれる、興味がある、興味深い、感興がわく」
- ③「趣がある、風情がある、風流だ」「すばらしい、すぐれている、みごとである」
- ④「滑稽だ」「変わっている、変だ、妙な、おかしい」

「おもしろし」がどのような意味領域として表われているのかを考察し、上記の分類に沿った調査結果を【表4】に示す。

【表4】「おもしろし」の意味領域⁵⁾

作品 意味分類	史記	毛詩	蒙求	論語	四河	中華	天平	天伊	捷解	天正	虎明	天理	狂記	狂外	続狂	拾遺	計	%
①楽しい	4	6	4	3	0	9	0	0	0	0	18	20	6	4	10	12	96	15.3
②興味深い	92	49	23	10	1	10	2	1	0	4	33	30	2	2	9	16	284	45.2
③趣がある	32	11	25	7	2	30	6	1	0	2	18	31	5	2	5	3	180	28.7
④滑稽だ	3	2	5	4	0	1	0	0	1	0	10	24	6	0	2	2	60	9.6
不明	5	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	8	1.3
計	136	68	57	24	3	51	9	2	1	6	79	105	20	8	26	33	628	

中古の『宇津保物語』と『源氏物語』における「おもしろし」の意味領域では、殆ど「興味がひかれる」(33.2%)・「趣がある」など(62.5%)の意味として用いられており、「楽しい」の意味が若干あるだけで、「滑稽だ」の意味は見当たらないようだ。また意味領域の幅も広くない。

しかし、中世における「おもしろし」の意味領域は、【表4】から分るように「興味がひかれる」・「趣がある」など・「楽しい」・「滑稽だ」の順となる。特徴としては、古典的意味の「趣がある」が大幅に減り、それまで「趣がある」の意味領域に押されていた「楽しい」と新たに生じた「滑稽だ」の意味領域の急速な意味拡張があげられる。

(21) 任侠ハソラウテコキスル物ソ自喜トチナリトモソ我トコレカ面白ト思フ心ソ
 〈蒙求抄一・鄭莊置驛 48 オ 9〉

(22) 蟹テモハサミカ肴ニヲモシロイ 〈蒙求抄三・64 オ 4〉

(23) 蟹ノヒケカ面白ト云ヤウニ是ハヒキ物ノ肴ソ 〈毛詩抄・一七 11 ウ 15〉

(24) 鄭玄カ義ハ面白モナイ毛ニヲツタト云師説ニヨメタソ 〈毛詩抄・十一 21 ウ 10〉

(25) とくに、いつとをれ共、面白道じやと云て、くらまに付 沙／＼ 〈狂言六義・鈍

根草・上 126-8)

(26) 其ハ曲モノイソラ狂人チャ程ニカウ走タカ面白ソ 《論語抄卷九・微子第十八・一二ウ 2)

(27) 陳平カ人ヲ殺タコソ面白ケレ其カホシイト云タソ 《蒙求抄三・29 オ 3)

(28) 身共は今まで脈をとられ事がなひが、おもしろひ所にみやくが有な 《虎明本・かみなり中 14・14)

例(21)は、「楽しい」類の意味に解釈される例である。原文の「以任侠自喜」にあたる部分で、人を助ける行動即ち「任侠」に対して嬉しがるという文脈である。

例(22)と例(23)は、少々珍しい用例である。肴に関係するものとして、「蟹のはさみ」とか「蟹のひげ」に「おもしろし」が用いられていること自体がまれであり、意味の面でも興味深い例である。前述の例(8)もこれと同様である。意味としては「興味がひかれる、面白い」類になるが、例(8)においては前に「当世ハヨイ美物ヲモタレタリ共」という表現、例(22)では前に「うまい物」という表現が出てくることから、「美味しい」の意味にぴったりする例である。『時代別国語大辞典 室町編』の「おもしろし」の意味プランチのうち、一の③「一味変った味やにおいを好ましく感じるさまである。」という意味領域に近い用例のようだ。

例(24)と例(25)は、「すばらしい」「趣がある」のような意味領域に分類される例である。この類の意味領域は中古の「おもしろし」の典型的な意味であるが、中世では大きく減少したものの、なお比率が高い。

例(26)から例(28)は、「滑稽だ」類の意味に解釈される例である。人の行動、人を殺したことなどに対する「おもしろし」である。「滑稽だ」の意味領域はその他の意味領域に比べれば、主な意味としては用いられていないが、中古にない意味としての急速な拡張が注目される。また朝鮮資料の『捷解新語』においては、「おもしろし」の用例が1例だけであるが、その意味は(29)のように「滑稽だ」の意味として表現されていることから、この意味領域の位置が見られる。

(29) あわれおしゑさしられ加なさてそなたわおもしろいひとちやは加すとうくもなうてひとおは加すひとちや 《捷解新語 19 オ)

このように、中世における「おもしろし」は、「趣がある」類の意味領域の急速な減少、その他の意味領域の増加、新しい意味領域の出現という意味変化が見られる。

4. おわりに

以上、中世の抄物類と狂言類を対象として「おもしろし」の意味・用法について考察してきた。「おもしろし」という感情形容詞は、幾つかの意味を持つ多義語的性格が強いので、特に類義関係の微妙な「をかし」と合わせて分析すべきであるが、紙面の関係上今回は一緒に分析できなかった。「をかし」の性格を黄(2000)及び黄(2001)によって簡単にまとめると、

第一、連体修飾用法における被修飾語を分類すると、中世においては、「人間活動の主体」が増加する反面、「自然・自然現象」などが減少するが、用法が抽象的關係と人間關係の用例に固定されるようになる。

第二、中古から中世にかけて、連体用法の大幅の増加と連用用法の大幅の減少という変化が見られる。

第三、対象では、「人間活動」の比率がもっと高くなっており、結果的に「人間活動」「人間活動の主体」に対して主に用いられていくようになる。「行動・様子」「芸術・文芸」「言動・名」の比率がさらに増加し、「をかし」の対象の殆どを占めている。

第四、意味の面では、「滑稽だ」39.5%・「変だ」33.7%・「趣がある」15.9%・「おもしろい」9.9%などのように、「滑稽だ」・「変だ」の意味領域の急速な拡張と中古的な意味領域の大幅の減少が見られる。

などのような特徴が浮かび上がる。このような「をかし」の特徴と合わせて考えると、前述した「おもしろし」の性格がより浮き彫りになると思われる。「おもしろし」と「をかし」は、その意味・用法においてきわめて近似し、類似性が認められるが、時代によって両語ともに用法・意味の変化が見られるものの、その内容は大きく異なることが確認できる。

今後は、類義語同士の関係から意味・用法の全体的総合的な検討が必要であろう。

注

- (1) 狂言台本のうち、中世のものは、『天正狂言本』のみであるが、近世初期に書き留められたその他の台本も中世(室町時代)のことがばを伝承したとみられる点が多いので、比較考察していくことにした。引用にあたって表記を私に改めた所がある。
- (2) 叙述用法は、さらに二つに分けて「をかし。」のように句読点が施されているものや引用文の終わりにある用例は文末叙述と呼び、文末叙述以外のものは叙述と呼んで一応区別することにする。形容詞は、機能の面で形容詞によって各用法の使用頻度に差があり、また叙述用法と言っても文末叙述は評価性が強く、叙述は説明的性格の強い面があると思うからである。
- (3) 『毛詩抄』における「おもしろし」の連体用法は18例であるが、格助詞接続の1例を除く。
- (4) 対象は、連体修飾語として機能する用例のうち、「月などのをもしろかりける夜」のような用例、

形式名詞こと・ものなども対象分析に入れて考える。

- (5) 表の中の「不明」という項目は、いくつかの意味領域に解釈されうるものを指す。また、『虎明』『狂言六義』には各々3例の用例が「名前」を指す名詞であるので用例から除く。

参考文献

- 秋元美晴(1996)「形容詞の装定用法と述定用法」『林巨樹先生古稀記念甲戌論集』武蔵野書院
- 犬塚 旦(1973)「平安朝文学における「おもしろし」一字津保・源氏の用例を主に」『王朝美的語詞の研究』笠間書院
- 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
- (1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 小林賢次(2000)『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』勉誠出版
- 峰谷清人(1977)『狂言台本の国語学的研究』笠間書院
- (1998)『狂言の国語史的研究—流動の諸相—』明治書院
- 樋口文彦(1996)「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞—」『ことばの科学』7 むぎ書房
- 平澤洋一(1988)『枕草子と意味の構造』城西大学学術叢書5 城西大学女子短期大学部
- (1996)『日本語語彙の研究』武蔵野書院
- 黄 龍夏(2000)「「をかし」の意味・用法に関する研究—『枕草子』を中心に—」東京都立大学修士論文
- (2001)「中古における「をかし」の意味・用法に関する一考察」『日本語研究』21 東京都立大学
- 細川英雄(1992)「感情形容詞研究の一視点—『万葉集』に見える「かなし」の意味分析から—」『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院
- 松尾 聡(1982)『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』笠間書院、
- 森田良行(1996)『意味分析の方法—理論と実践』ひつじ書房
- 森野宗明(1985)「形容語の変遷」『日本語学』第4巻2号
- 山田孝雄他(1963)日本古典文学大系『今昔物語集 五』岩波書店
- 山崎良幸(1978)『源氏物語の語義の研究』風間書房
- 付記：ご指導いただいた小林賢次先生、ご助言をいただきました鈴木芳明氏、中川美和氏、小西いずみ氏に心からお礼申し上げます。
- (ファン ヨンハ・東京都立大学大学院生)